

公益社団法人日本クラフトデザイン協会

事業評価委員会 議事録（学術・文化の振興のための活動）

日 時：平成26年3月8日（土） 15:00～17:00

※第2回定例理事会の議題として審議された

場 所：酪農会館会議室B （東京都渋谷区代々木 1-37-20）

出席者：（理事）岡本昌子 相川繁隆 水野誠子 磯谷晴弘 海野えり子 菅野靖

栗原くみこ 西川雅典 林範親

（監事）露木清勝 堀内雅博

●事業の報告について

・担当理事から事業について報告がなされた。

—原点と可能性— 第53回日本クラフト展

会期：平成26年1月8日（水）～16日（木） 9日間 11時～19時（最終日16時）

会場：東京ミッドタウン・デザインハブ

（東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウン・タワー5F）

賞：経済産業大臣賞・日本クラフト大賞1点・優秀賞1点・読売新聞社賞1点

招待審査員賞3点・U35賞1点・学生賞1点・奨励賞6点

併催：トーク・セッション「クラフトを楽しむ」平成26年1月9日

素材別作品解説 平成26年8、9、11、13日・各日2回、計8回

応募数：635人 1778点

入選・展示数：305人 821点

入場者数：7736人（9日間）

以下、各項目の担当理事からの報告と評価委員の意見等

●実施会場について

・今年度、丸ビルホールから東京ミッドタウン・デザインハブに移行した。細かな点では従来と勝手が違っていたが、実行委員会を中心に会員皆さん、また関係業者の協力で無事終了した

～会場の変更という大きな案件があり、無事終了したことにまずは安堵している。六本木という立地、周囲に美術館も多数あり、デザインハブはデザインの発信地的存在でもあるため、これまでに無かった効果も今後回を重ねることで期待できる

●実施体制について

- ・23名の実行委員会体制で準備等を行った。事業規模が大きく委員以外の会員の協力も多数得ての実施であった。地方在住会員も多かったがメール等で情報交換を行った。
- ～協会全体が一丸となって取り組めたことは大変評価できる。今後もテーマ設定等の段階から積極的に意見収集等を行うよう努めてほしい

●応募状況について

- ・前年度よりも全体の応募者数は伸びた。しかしながら目標には届かなかった。
- ・学生の応募が多く、部門が定着したことが伺える。若い世代の作品の質も非常に高い。
- ～今後、若い世代が実力を伸ばせるようなサポートができるか具体的な検討が必要。
- 応募要項配布の時期を更に早めることが肝要である

●展示について

- ・新しい会場であることから、搬入出等のことから様々初の事であり、準備に労を要した。奥行のある会場を生かし、見通しのきく展示にした。
- 外光が入るため、ドラマチックな光の演出は出来ないが、より生活に近い形で親しみやすい展示とした
- ～展示については概ね好評であった。什器類もシステム部材を多用し、その場で廃棄する従来の展示を見直した点も評価できる

●展覧会告知について

- 会場が変更になったが、これまでとそんな色ない入場者数であった。展覧会周知は圧倒的に知り合いからの紹介が多い。こうした事を大切にしながら新しいツールでの広報も検討していく必要がある

●来場者へのサービス

- ・会員による素材別解説、トークセッションも作品を単に見て楽しむだけでなく、幅を広げるイベントとして好評であった
- ～デザインハブという特質から入場者には従来よりもデザイン関係、特に若い世代が多かった。作品解説の域を超えて、素材や文化にまで踏み込んだレクチャーになると展示の併催ではなく、両輪での催事となっていくのではないかと。また、会期中実施した親子ワークショップも会場全体が和やかになり、子供たちもたくさんクラフト作品に触れている様子を見て非常に微笑ましかった。

●事業目的の達成について

応募者数、入場者数共に目標の数字への達成は果たせなかったが、若い世代の応募者の増加と質の向上が大きなプラスの要素である。大学生だけでなく高校生の入選もあり、将来に向けて、事業を継続していく必要がある。

今回の日本クラフト展は5月に予定されているパリ日本文化会館での展覧会に形を変えて引くつがれていく。また、韓国や台湾等継続的に展示のオファーがある。こうした展示を積み重ね、本当の日本のクラフトの良さを伝えていくことが大切である。今後、東京ミッドタウンの地域のイベントとしての展開も視野に入れ、別棟のクラフトショップ等との協調が可能になるよう取り組んでいくべきである。

以上